

12【街の散策からの気づき発見】

都鳥の碑文と春日部八幡神社参道

会員 K.T.

春日部神社表参道の入口に都鳥の碑文がある。伝承は、伊勢物語の第九段、在原業平の東下りに、武蔵国と下総国の境にあった隅田川の渡しで、川岸にいる白い鳥で、くちばしと脚の赤い鳥をみて渡し守にその名を聞くと、「都鳥」と答えた。業平は、都(京都)のことを思い出して歌を詠んだ。

「名にしおば いざ言問はん都鳥

わが思ふ人は ありやなしやと」

この業平の都鳥の故事を後世に遺そうと、嘉永6年(1853)5月、粕壁宿の名主ら千草正三位源有功に依頼し、由緒を碑に表した、と伝わっている。

【表面の釈文】

「隅田川はむさしと下つふさの国境なり。陸奥に往きかふ道にあたる所を春日部のうまやといふ。在原の中将の、いざこととはん都鳥、とよめりし跡なから、(中略)

正三位有功

とはれつるあとたにとめよ都鳥 むかしは遠きわたりなりとも
神垣にたてるひときをためしにて 千代にさかえん春日部の里」

和歌も巧みであった有功は碑文に自身の和歌を添え寄稿した。裏面には碑建立の経緯が記されている。

【裏面の釈文】

「新方40余郷惣春日部八幡宮は旧領主春日部治部少輔時賢主隅田川の岡に造立せられたる所なり。こたひ千種殿に乞奉りて詠歌を碑面に彫刻する。又方生会再興の為に高田式反五畝三步を寄附して永世二傳るもの也 嘉永六年 五月立」とある。

「伊勢物語」は歌物語の古典として有名で、その成立時期や誰の手によってつくられたのか不明である。研究者達によると、長期にわたり何人もの手が加わって、平安時代(794~1185)の初期の頃に成立したらしい、とされている。各々独立した短い章段で、在原業平と思わせる“男”を主人公にした和歌の物語だ。

「初 むかし、男、うひかうぶりして、平城の京、(中略)

春日野の若紫のすり衣 しのぶのみだれかぎり知られず(後略)」、大人の仲間入りしたばかりの主人公が大人の作法に従って、女性に歌を送る初段に始まる。そして、歌物語が続いていき、

「百二十五 むかし、男、わづらひて、心地死ぬべくおぼえければ、

つひにゆく道とはかねて聞きしかど きのう今日とは思はざりしを」と、辞世の句で終わる。

余談ながら、粕壁宿の名主達が「伊勢物語」にある都鳥の伝承碑文を建立した嘉永6年(1853)の世相は、日本との交易を求めてアメリカ東インド艦隊司令官ペリーが4隻の黒船を率いて浦賀へ来た年だ。ペリーは幕府に開国を要求、幕府は翌年まで回答を延期する。翌年の嘉永7年(1854)1月ペリーは軍艦9隻を率い、江戸湾へ入港し幕府を威圧して条約締結を迫り、3月に日米和親条約が締結された。この時代を表す有名な狂歌に、「泰平の眠りをさます上喜撰たつた四盃で夜も寝られず」、宇治の高級茶“上喜撰”と黒船の“蒸気船”を引っかけて、ペリー来航に幕府が右往左往している幕末の世相を江戸庶民が狂歌にした。当時、日本中が「大変だ!」となっていた時期に、「何故?」、都鳥の故事を碑文にして残そうと思ったのだろうか、その理由は不明のままだ。また、この「都鳥」の「隅田川の渡し」の故事は、東京都墨田区にもあり、どちらが史実の地かは、これも不明のままである。しかし、不明でもよい。伝承は歴史に思い馳せる楽しみがある。

